

令和5年2月1日に思う

「外交・友好の一役を担う」ことは、何も人に限ったことではありません。わが村の吉野杉が海を渡って馬頭琴に“変身”し、このたび帰国しました。日本とモンゴル国の友好を深めた、と言って過言でないと思います。

去年は、両国の外交関係樹立50周年の節目にあり、記念事業の一環でモンゴル国立馬頭琴交響楽団が来日、各地で演奏会が開催されました。

その初日が11月30日、東京のNHKホールで開催され、天皇、皇后両陛下とモンゴル国の元大統領と現大統領が同席するというこの上ない舞台上、吉野杉で作られた馬頭琴が紹介、披露されました。音楽を楽しみに来た方々の歓声と拍手の中、会場のボルテージが一気に高まり、民族楽器と重厚な音色がホールを包みこみました。この吉野杉の馬頭琴を誕生させ、今回の記念事業を企画した佐藤紀子モンゴル国文化大使に招待され、演奏会後の貴賓室（NHK）でも、両陛下と両大統領が歓談され「奈良県川上村の吉野杉馬頭琴の音色が両国友好のシンボルになった」と実に和やかなお席になったとお聞きして、胸が熱くなりました。

この演奏会は、全国13会場で開催され、本村では師走の9日にやまぶきホールで開かれ、ほぼ満員の方々が民族楽器に酔いしれながら吉野杉でできた馬頭琴に耳を澄ましていました。

長きにわたり両国の外交友好にご尽力されてきた佐藤紀子氏とは30年をこえるご縁があり、民主化されたモンゴル国の環境や食問題、文化音楽の保護に情熱を持って取り組んできた一方、ダム後のわが村の再生にも、深く関心を寄せられた彼女は、まさに才色兼備であります。益々のご活躍をお祈りします。